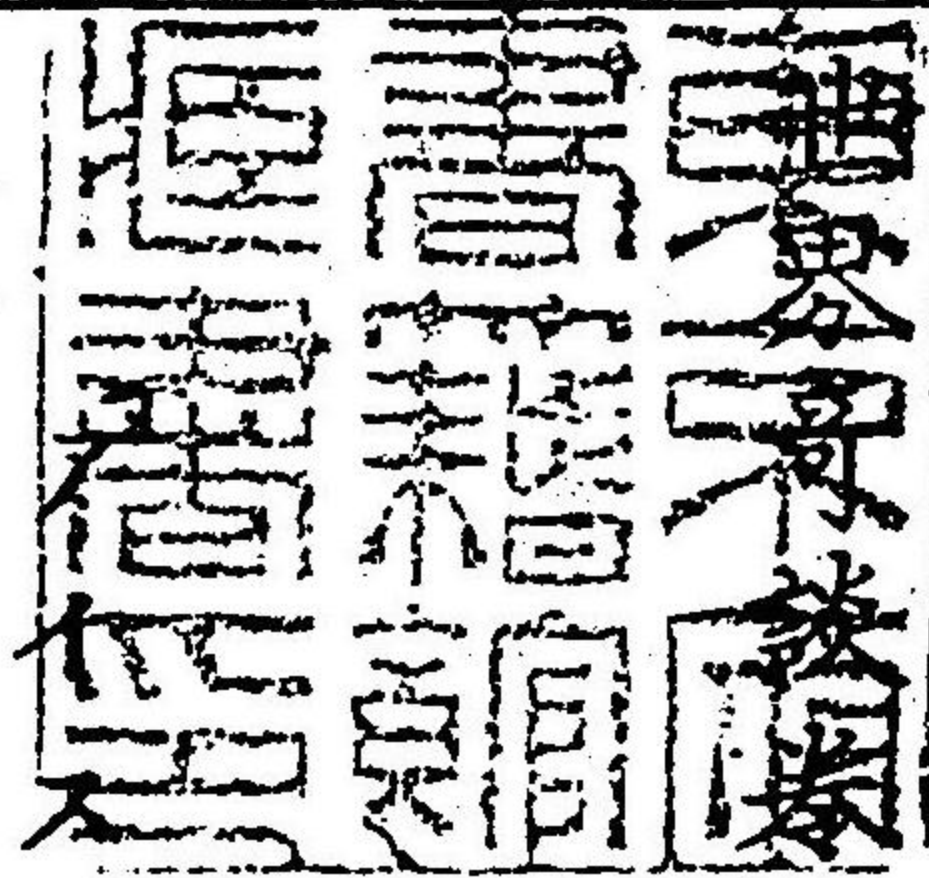


古今圖書集成
世界奇談

持31
598
三
三册 一號 二架 七函

三本



之二

久保扶桑 譯述

アイスランドの北部乃暖帯より寒帯へ

接するを以てイギリスを以て氣候大なる

むく丘陵峽岩駢列一時やて地上を燒漬する

砂石は時々多事あり是れ則ち火山の絶頂より

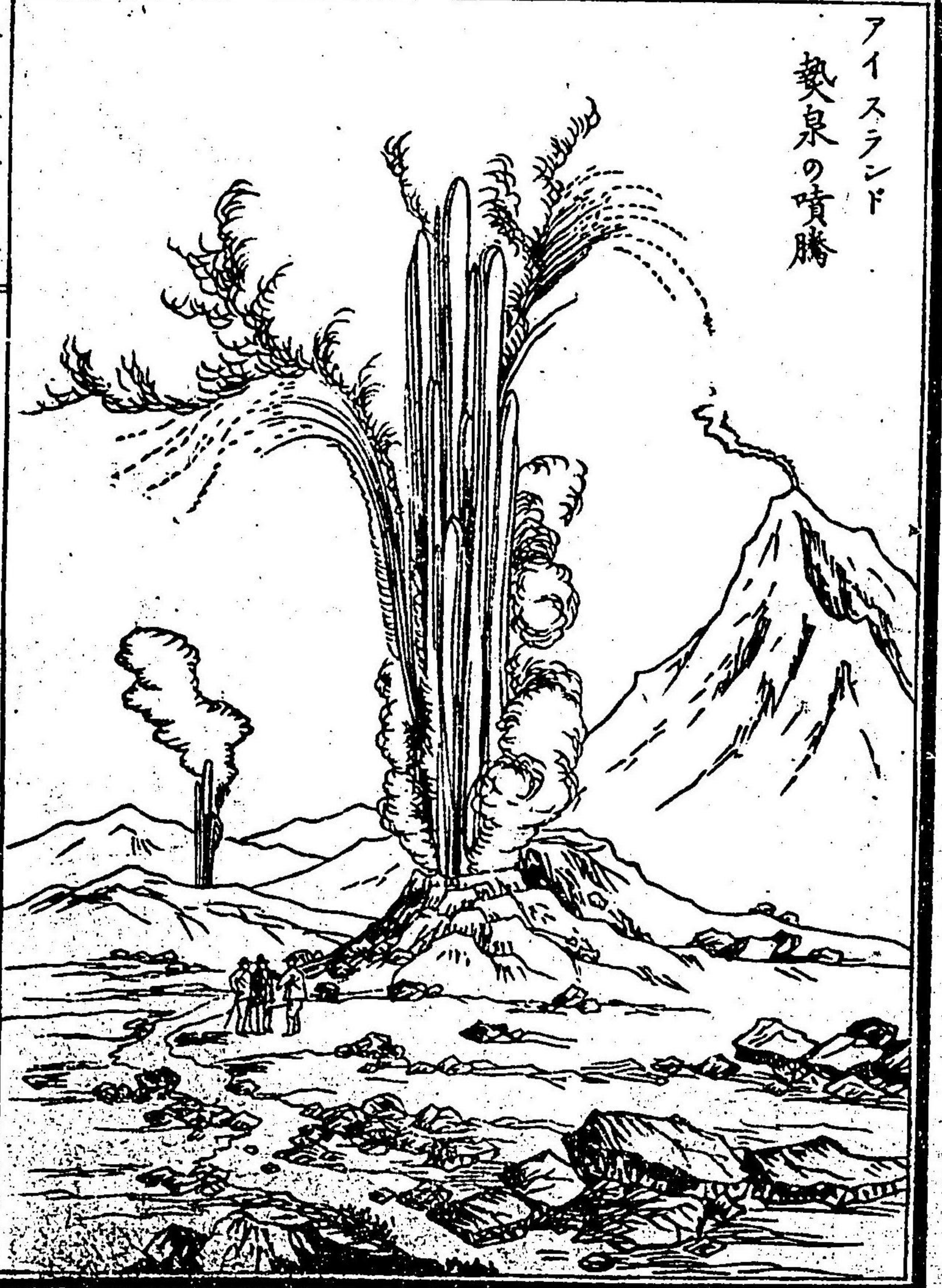
吹出せるを以て其を浴解する石の異

らば抑大地乃外面なる通常平穩不見ゆる

世界地理

ありて此島の如きは山頂に雪の冠と戴き、氷の
 氷乃肌を現し、雖も地底に不断火脈流通を
 偶水脈に觸るるとあはば冷水頻ら沸騰し直
 ち地上へ激發し其勢石を飛し其熱よく物状
 熱燄を小時間止み小時間再び再び發
 せしむるは此水勢の充ると否と云ふは
 此地熱泉の無数ある中大小二箇の
 並に有名ありと云ふに激騰や云へる
 意ゆゑ頗る名實相適せり旅人の多く此地
 來ると熱泉此景況を眺望せん為る者ぞ却説

アイスランド
熱泉の噴騰



ヘクラ山



通せし如く
あま多氷雪
是が多氷雪
溶解して更
洪水の害
成酸し大口
より巨大な
る巖石五里
の外に飛散
しこれ間



雷電絶ず鳴
動焔灼せし
と云りか
多天災の罹

國の損害を實に愍然をばと能み多州木共
ふまやぐり枯果恰も毒水を漑き多はが如く子
て家畜形ど此是成喫まはあねを忍ち病を幾し
く死に至るまで

アイスランド大略の事

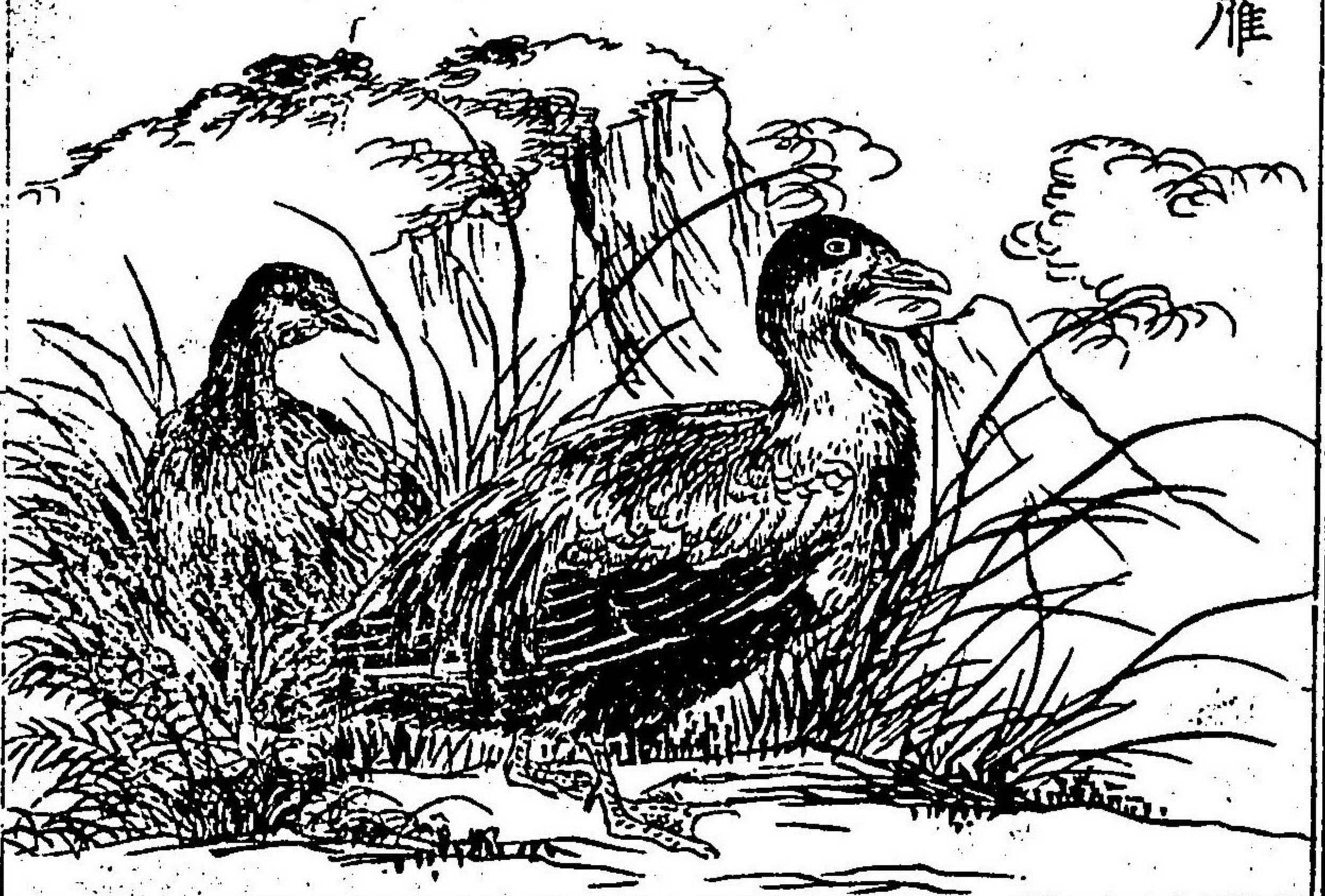
アイスランドにゆるる海岸は沿ふは唯一箇に首

府のまじりも其景况恰も邊鄙なる村落に異あり
を人民多くを魚澳を以て業とせし屋舎を材木
以て建築り戸牖を種々奇麗に彩色せり然る
も此地に一箇の逆旅を以て故り此國に來り旅亭
を要むる者を必し以て堂に至りて寢食せしめ
素來これ堂を説法を以てありし萬端の用を
多くを建つに或貴人の堂に詣りし土
人皆椅子の代りも大なる箱に上り腰を掛たり
これ故と問ふに口々答ふるに君よ我々の此
箱の内は最も羨むる衣服財貯ありや又農夫の

合財囊も皆堂中へ持來し凡て其を公有的
物置場と異あり門戸に錠をく人々所有の品
は用ゆる時を隨意に出入せり家の外部は種々
彩色を加へるれを窓に少き而已ありは全く是
は開けざるは由る室内甚く快爽しはそのうへ土
人を皆新生乃空氣及び清淨を以て水好むに身
體衣服を多く垢染を以て洗濯を加ふる事稀あり
て不潔あり常に少き馬を騎り峻岨を奔走し其
馬活潑あり多踏くあり夏の間は漁業と
一冬天に至ると是は賣買す通例に食物を魚類

及び牛酪を令然し此牛酪を長く蓄へらば様
 不堅く乾燥するはこれをねを臭氣甚しかるる
 を思ふれり有富家に至てハ牛羊の肉及び裸
 麥を製しは來麵を食し美嚴ある家に住居
 戸窓おとび百般の要品をデนมールクより運
 輸せり衣服を温暖あるは尊ぶ故都て毛織物を
 用ひ就中婦人ふ至りてハ風姿甚鮮妍し青色
 なる織物の上衣なる深紅の短衣は粧着ひ赤青
 乃襟巻は纏ひ髪の間を銀乃鎖をかけ織物の小
 片を結付て高く花美なる帽は冠をり此地にて

雁



羊より羊毛を採るは器
 械をけせば婦人自ら是
 以瀑し或は紡績し或は
 織て衣裳せり或は手
 套莫大小を編て全冬を
 毎宵家々此間し此譬る
 又雁の胸より
 採取する織き毛を聚る
 商品とせり此毛至て
 和より多且温暖を

土人此毛取んが為雁を殺さずや禁
鳥亦更一人を怖るは場所よふる足の容
は所もあく稠密雁の巢充滿せよやいへり去
乃鳥雛の為ゆふ巢の内へ已に織毛を抜て敷
きり土人此所彼所と徘徊する鳥の巢不在
を窺ひ寄り竊ひ織毛及び卵兩三を取去せりか
るやも知らば此鳥を再び胸より織毛をぬき
る巢小敷き如斯きは事再三若し雌鳥の毛尽
ば雄鳥又隨て是以補へる蓋し此鳥を周年此地
に居るに何ら僅る雛の浮遊まで成長す

をた一羽も残らば何國やも多く飛去り婦人
如此巢より取聚えたる織毛乃高を増うんと
ゆ藁及び其他のものを混じりて賣品とせり

潮流の事

往昔世界よりアメリカに如き大なる洲あり或は知
らざる頃名乃知るは樹木の二三本イキリ
る乃海岸に漂着する事あり是を全くヤウロツ
パアジャアフリカ洲の各地に生るるを其を
よねばかりとく物事以考思ふる人々何地より
来りやや大なる不審を起せり是即ちアメリカ

カ洲より潮乃流通ありて茫々多岐數千里の洋中
 以浮漂ひ來るも此を是の潮流とゴルフスト
 レームと呼び赤道直下より來るも甚太と温暖
 あり多色亦他と異る此潮流のイギリスより來
 るは無量の鴻福ありアメリカ洲乃内よりイギリ
 スと同一度と於ける地ありは此潮の流通せ
 きは由る殆どアイスランドグリーンランドと
 異るは甚寒氣甚と凛烈なりイギリスより來
 乃潮流を冬んバ氷雪を嘗て一年乃半を船
 艦は航海も冬んバ寒帯地方同様あるべき如

海葡萄



此温暖なる海潮アメリ
 カ洲のメキシコ湾より
 歐洲の西海岸に流通す
 るは以て氣候暖和と變
 化し周年海面凍固乃憂
 ありは偏るゴフルスト
 レーム此為あり又あり
 流潮も浮漂る希代の海
 艸あり枝葉子實よく葡
 萄に類す舟子等是以海

葡萄と呼ばんと是は取来たり所なり殆ど船
艦乃通行は妨ぐる程充滿せり云々

北極海乃事

世人皆北極の周圍を氷海にして航海適くさ
ふとい言ふも其言は古來是は探索し出發
せし人も多く寒氣は為小妨げらる其志は達
せし人もかまらず近來此の北極と發明せし大
論快ふ一話あり云々トクトルカンと云へ
る人此地方は探らんを出發し三冬に開る氷の
中を碇泊し春夏に至り漸く氷の溶解は従ひま

北極無氷海



まし北極に向て航する
數百里終る氷全く盡き
是れ如き開豁なる海面
は出たり水色藍緑なり
て較温氣は帯び輕波漾
々々として綾をたらし
浮島飛たぐり空氣も寒
烈なり温暖なりと更
北極に接近地方に思
はる程なりトクトル

カン北喜ハ一方形ト成成功の記号ヤトモ此
地ヲアメリカの旗ヲ建ル至古也此船將本國の
人ある以以テ其處より舟子等疲勞と厭ハ
自余小到ト直ちに帰國セリ也蓋一北極の氣
候如斯温暖チハ即ち前リ記ルるイギリスの
おや温暖ある潮乃流通チハ故ルん歟

銅色人の事

西大陸アメリカ洲なる歐人乃渡来セザハ以前
より多く此土人現在リ此人ハ層波銅色トモ
歐人のおよく白色トモナラズ歐人曼セアメリカ

シ、インデアニスと云此洲を素来人民乃生計
都合ハ地土地ニて川魚類充滿一森野獸多
く水牛鹿馬又白露國鳥及鳩の類と産セリ斯
の如き天幸得たる土地あれども土人頑愚
殺伐好々如何様小訓導もねども物々々以考
究發明チハ事固より少も學問乃志チク歐人
山野を伐拂ヒ屋舎ヲ建築リテ田畑を開墾一穀
物を種植セバそれと遠境ニ避ヒ隨意ニ耕
森の下ヲ駈回リ獸跡を發見一々去テ逐
一或ハ濱海ニ出テ漁獵トモ漸ク鐵を免

るふ雨露を凌の小舎以て満足一只管知識を
開き舊弊を脱除を厭ふ故に歐人此州に殖民せ
しより日月の力を得方今に至る土人の
髪或殊に微なき番のごとく土人の脊高くして
立派なものを面部の彩色却て風貌乃美に損せ
り平生香をまかせモカシと呼へる軟弱をな
革或まを以て股列を織物若くハ革を以て靴と縫
付るを多に脱却し便を千種萬様なものを
ふる裾短き衣服の胸中は一帯乃帯を多しり頭
ふ大鳥の羽を結べり多し晴着乃衣裳は水牛

此所謂善神ト云
其ノ語ハ此ノ所ニ
以テ所謂神ト云
其ノ語ハ此ノ所
ニ以テ所謂神ト
云

若くは鹿の皮を製するく圖を画き豪猪の
脊上を生ずる刺毛を飾り付け又已を敵せし
人を殺し其毛髪を製りたる一箇の髪を掛し
敵を殺し其頭乃皮を剥取も亦一ツの風習也
土人神と稱し一箇のものを種々供物を捧
げ拜礼尊敬し之れを父と呼へり又愚乃を
已むは害せんともは時ふ當りたる善神も保護
する能くは世界に恐怖をばはる悪神多し

Shirup-6 Society
 1914-1915
 American Indians



銅色人

世界奇談 卷之三

日本にモ 甚多 奇術 あり 其 術 之 一 班 哉 知 る 由 多 雜 州 あり 製 一 一 之 藥 劑 之 救 急 患 者 疾 快 復 せ 一 む 多 希 有 之 とい へ ば 他 之 功 者 此 醫 亦 多 ね ば 藥 方 此 善 惡 多 拘 之 ば 去 也 試 服 用 之 ば 乃 外 奇 然 之 去 の 醫 神 乃 秘 術 之 知 推 惡 神 之 上 之 あり 之 偽 稱 之 を 以 之 土 人 死 臨 之 是 之 迎 之 亦 之 以 所 以 之 あり 此 神 術 者 乃 服 之 野 獸 之 皮 之 以 之 製 其 絲 恰 之 真 之 獸 之 怪 之 あり 斗 之 病 床 之 入 來 之 大 喝 一 聲 槍 之 あり 且 舞 之 言 低 之 聲 不

いへば偶疾病ありて醫を迎ふるに是す少く
 其術の一斑哉知る由多雜州あり製一之
 藥劑を救急患者疾快復せ一む多希有之
 といへば他之功者此醫亦多ねば藥方此善惡
 多拘之ば去也試服用之ば乃外奇然之去の
 醫神乃秘術之知推惡神の上之あり之偽稱之
 を以之土人死臨之是之迎之亦之以所以
 之あり此神術者乃服之野獸之皮之以之製
 其絲恰之真之獸之怪之あり斗之病床之入
 來之大喝一聲槍之あり且舞之言低之聲不

世界奇談 卷之三

三

轉高きる恰も豺狼乃吠るに異なりて土人の目
も放さば慎肅尊敬し如くの間も若く患者の死
まふあやあねむ善神乃意は適きを思ひ医も亦
慢然己事の持来をも雑具取く付他乃病者
むかつて走行り

アメリカ土人小兒を肩負ふ具の事

アメリカ土人幼稚の小兒を圖ふ掲ぐる如く臺
ふたふたを肩ひたるけり此具イギリスにて赤
子以休むむる籠と名大異なり一枚の板
片の下部に少くも足ふたふた付け小兒ハ恰も

立てるが如く臺の甲側より乙側を達する数條
乃紐めて千鳥がけより多量なら上部一條乃
木輪ありてこれより頭城まで一聴と保たれる
バ小兒を脊上ふ肩より毫も手足以働かざる
と能く母も是を以て廣き紐を付て頂乃上り掛
たり小舎を歸るバやがて小兒は腕城ゆる免手
遊乃器以與ふおも少く金錢のかゝるも城作り
花美しく且音に錚々たるも是より上部乃輪
結びきげ小兒を數時間おも城戴玩して樂み
借母の小兒以寵愛を甚と懇切に多若小兒



の死をばあといふ
 ば愁歎限なく存生
 中の如く脊上に此臺
 なる黒き鳥に羽以
 けをけなくも一
 年の間に肩廻り
 時を多小舎ふ所
 手業をなすに己
 坐せる側へ去
 の空虛の臺に立て

か多寶く小兒は目前に現在をば如く懇々情
 状尽し種々寵遇の仕打てさせり嗚呼野蠻蠢愚
 乃者やいへども人情の厚き斯の如く看官をれ
 去を成歎どば可けんや

銅色の戦士藥囊を所持する事

アメリカ土人此小兒や成長をば前と言へ
 る臺より束縛を免る母をば以補翼し隨意
 草の上を旋轉せしむ素来小兒を身体の頗る
 健剛をば故速く血氣壯士と成長せり此
 父母時ありて張幕し住む時をば丸木

以多作^りなる小舎^を住^ま免^がも夏^の間^を都^て張^え
幕^は用^ゆ内部^は疎^く闊^く—多^く少^くの家族^が容^らる^る—
くおをウエグエムと叫^べり其仕組^を圖^づふ掲^げる
おとく長^き数本^の棒^を建^て廻^り—頂^上は一^束
ふ纏^り綴^り合^せるは水牛^の皮^は和^らうふ蹂^躪
き—よく不潔^を去^りて是^は覆^ひ稀^くは其表^り
人畜^{鳥類}と画^きるは鍵^綴る多^く婦人^の手^ふな
まて頗^る巧^くあり又^は去^りの張幕^を取^ぬる時^は
家内^の混雜^言んうと明^く棒^を一^束こもばね移^る
了^る地所^{まで}馬^を負^せて運^送—婦人^を奔^走り疲^る

勞好^んどお此荷^を負^ふは馬^を騎^り却^て説^は壯^し
士^を運^働を好^む時^は—ては清^く涼^{なる}河^水に浮^ぶ
遊[—]又^は渺^々は廣^野を父^と共^に馳^廻り或^は
戦^争の都^度々^は老^士の打^取るは敵^の負^杯を聞^か
甚^ど諭^快く日^月を送^りては戦^争お出^る者^は
武^士と名^付く氣^性勇^猛—くもや人大^{なる}傷^を
以^て蒙^るも哀^と叫^ぶふおとあ—い—は武^士の數^を
入^らぎは少年^{十五}の春^は迎^へ遊^戯を離^れては
隊^を入^らんと欲^{する}も一^の藥^囊を得^ぬは老^者
練^の士^おれを許^さば益[—]ては藥^囊は得^るふ



アメリカ人の小舎

己は此住家より数里隔
 絶多の一箇此洞に赴き
 其中の坐を占え凡そ四
 日に間断食を以て苦
 うをねば神明の感應ま
 してんあし必せりやひ
 多き覺悟を極え坐右
 更り一と一滴乃飲食
 く鐵の多し身亦迫り
 厭ふ勇氣凛然たるを

と日月出没星辰周廻する程り心身漸く勞斃さ
 る能くは終り倒れ臥し多兩眼を閉り自ら思
 へらくかゝる時日あは神明何れ以て藥囊を作
 るを告げぬと己も多疲労し絶
 へて眠りて催し若くは時廣野に大なる水牛を
 獵し其皮を夢みよ目覺て意へらく神明我れ水
 牛の皮を以て藥囊を造るを告玉へると是より
 して夢に入るとは鹿馬大兎の差別なく獵獲
 り其皮より藥囊を作ると常中諸困夢覺來る
 て後より足踏し洞の中を立去ると己

是此張幕^{ちやうまく}近寄^{ちかよ}り直^{ただ}ち母^{はは}の食物^{じきじゆ}を乞^こひ心の
ち、に貪食^{こんじき}しやグて水牛^{すいぎゆ}を獵獲^{りやく}せんと馬^{うま}を驛^{えき}
了^{りやう}廣野^{くわうぎや}より馳出^{ちいで}て兼^{かね}て案内^{あんない}を知^しるはとせぬ
だ怒^{いか}ち無數^{むすう}の水牛^{すいぎゆ}より出逢^{いであ}ひたの大^{おほ}き外^が貌^{ぼう}
る實^{じつ}に猛^{まう}々^々粗^こき髪^{かみ}を丈^{ぢやう}長^{ちやう}く振^ふり乱^{みだ}して兩^{りやう}
眼^{がん}を覆^{おほ}ひ兩^{りやう}角^{かく}尖^{とが}まて見^みるも中^{ちゆう}々^々寒^{さむ}心^{こころ}ト此^{こゝ}有^あり様^{さま}
あせせもの壯士^{ちゆうし}る曾^{そう}てあせを獵^{りやく}殺^{ころ}ませき方法^{はうほう}を
心得^{こころえ}たる事^{こと}の是^{こゝ}バ馬^{うま}を鞭^{むち}うち水牛^{すいぎゆ}を逐^おふて馳^ち
しむるに此^{こゝ}馬^{うま}形^{かたち}短^{みぢ}少^{せう}あまやいへとも甚^{こゝろ}と駿^{うま}足^{あし}
あし多^{おほ}く怒^{いか}ち水牛^{すいぎゆ}より接近^{ちかひぢ}き壯士^{ちゆうし}る用意^{ようい}の弓^{ゆみ}矢^や

代^た法^{はう}がへ目^めぎせし水牛^{すいぎゆ}ときつ免^{めん}て射^やかると
む無^む慙^{ぜん}や水牛^{すいぎゆ}を大地^{だいち}より倒^{たふ}る、代^た得^{とく}るまや馬^{うま}よ
り飛^とぶり藥囊^{りやくなん}を作^{つく}るは十分^{じゆうぶん}の皮^{かわ}を取^とり去^さり
諸^{しよ}去^さり藥囊^{りやくなん}を何^{なに}等の益^{えき}あまやといふり土人^{どじん}思^{おも}
へらくあせ代^た所^{しよ}持^ぢまはるは悪^{あく}神^{かみ}敢^あて害^{がい}代^た加^か
へせと故^こと一生^{いしやう}涯^{えい}取^と失^{しつ}はせはる勿^な論^{ろん}もやへ巨^{こゝろ}
萬^{まん}の金^{かね}代^た積^ぢむや虽^もも他人^{たにん}とねと買^かふ事^{こと}代^た得^{とく}
然^{しか}し好^{この}がよ此^{こゝ}の如^{ごと}き愚蒙^{ぐもう}の土人^{どじん}も一個^{いっごう}の善^{ぜん}良^{りやう}
を宣^{せん}教師^{きやうし}より學^{まな}び天主教^{てんしやうきやう}を奉^{ほう}むは乃^な知^ち識^{しき}を開^{ひら}
き世^よと恐^{おそ}るべき惡^{あく}神^{かみ}と云^いふを好^{この}ましく神^{かみ}明^{めい}を通^と

カ自在に^カ身^カ保護^カをせし此道理と
了解^カバ忍^カら是等^カの藥囊^カも道路^カより投却^カるに至^カら
んあ^カと必^カたり

アメリカ土人未熟^カ乃玉蜀黍^カと取^カて大^カり會
食^カま^カ事

アメリカ土人乃種^カ屬^カたるや部落^カ許^カ多^カありや
へ^カ各首^カ長^カあ^カりて自^カり^カ是^カ以^カ紀^カ轄^カせり^カ此
部落^カハ何^カも滑^カ稽^カたる名^カありて黒^カ足^カ平^カ頭^カ鳥^カ腹^カ
あ^カる^カ多^カく玉蜀黍^カ以^カて作^カり乾^カ燥^カし^カ冬^カ
天^カの食糧^カヲ備^カふ^カも亦^カ十^カ分^カ不^カ熟^カせ^カざる^カ此

東^カ京^カ人^カの昔^カは
非^カヤ^カの音^カに
是^カ種^カの玉^カ
蜀黍^カハ
大^カ好^カ物^カナリ

玉蜀黍



一^カ入^カ嗜好^カイギリス
の人民^カ乃^カ如^カ此^カ未^カ熟^カ
あ^カる^カ多^カく收^カ納^カの秋^カニ至^カる^カ
そ^カの穀^カ物^カ以^カて取^カ食^カふ如^カき
不^カ經^カ濟^カ乃^カ行^カ状^カる^カを^カと^カ
是^カの土^カ人^カ至^カて
活^カ計^カニ注^カ意^カせ^カる^カ多^カ白^カ
人^カ程^カ險^カ約^カと守^カら^カ野^カニ
於^カける^カ此^カの穀^カ物^カの^カ新^カ
と穂^カを^カ生^カし^カを^カ軟^カ弱^カなる^カ

と見えは婦人郊外に出るまで其経験一項合を
まば小舎に帰りて會食の文度にかゝり家事を
勿論如何なる事件も捨置き面々余の食物
を取らざ服を空にして會食の日を待ちたり己
不用意も調ひぬまば毎戸舉て全村の中央を
明地を聚合り隨意に遊戯とせり尤土人の張
幕甚と稠密に接近し別と設けるは地もなまれ
る則ち毎戸の間りか多る逍遙地のおとけりこ
ゆり電をつり取り取来たる穀物と煮炊し最初
の一鍋を神明と捧ぐるを四人の草翳る鳴物

及び穀物乃穂を手も持ち電も添ひ酋長及び武
士各各順席以て輪形に立並び何れも穂を持
して神恩を謝するの歌舞を形し又地上なる無
数の皿より水牛の骨もて作られたるを措き先づ
煮ゆまらぬまで焼くは穂と添へ法の如く神と
捧げ次ぎ煮炊するを始とす酋長始とす多し
喫し尋て一統の種属飽ちる會食し謡ひ且舞ひ
穂の實入もなまらざる頗る愉快り身代まかせ日
々出まは採喰ひやゝ実の固着して好嗜の味ひ
と失もな程了至まば所中なる其終野に残り十分

ふ熟を待ちておき以收納り

アメリカ土人水牛を獵獲する事

造物者の蒼生を愛育する慈母の赤子に於るが如くおめく其土地に適當なる食物を勿論總ての要品と授け玉ひ彼我人種同ドからば國り寒暖の別ありや虽も普天の下卒土の濱を以保護るに依りてはるをなくテアランド乃邦人よと與ふるに快鹿を以てアラビヤ人よハ駱駝を以てとるが如く寒帯困餓の貧民よハ鯨海牛海豹と與へ熱帯酷炎の地方に住まはる人民よは汁料と

保てる美大の果椰子波斯東を生まる等則ち後葉に於て詳細な説明を如く備かくし如くは

アメリカ洲に於ても土人及び白人の食料に適

する為曠地は吠奔する数千の獸あり中よも水

牛の肉を土人の要重なる食物とすは此動物

殺せば一日も生活を保ち難き程を全冬の間

これ肉を乾燥し夏日ふ至り食料となせり皮を

裁断して衣服及び張幕と縫綴り其外一般の器

具皆水牛皮骨より成るがはるは土人の

水牛は獵獲するはる乘る馬たり是る曠野に成長

性質頗る鋭敏なりまづ此馬以捕へんと欲
しんば別り馬上に騎り郊原を遊走せる群馬
馳入り直ちに接近せる馬の頭を携へるは羅を
投掛りや群馬を忽ち四方に奔逃去きども縛を
受るは馬を奔躍せしむるは從ひ咽喉口の縮迫を以
て寸歩も遁逃する所とぞんば土人を乘りし馬よ
り飛下り新に捕へるは馬の前足をとりて暴動
を誠め頓く己の張幕を導き歸りて使用せるも
能はり儲水牛を其体肥太めしと敢て疾走せし
能はり土人を駿足ふる馬を騎り脊上り懸たる

房より箭と抜取て射るにねむひは違ふ事殊
稀なり時ありて大獵を催し全村の種属擧て馬
上り騎り渺々たる郊原に水牛を群り居り八
方より透間をく取囲み一度に標立て各方より
射出る箭を電光の如く驟雨に均しく入り乱
たる人畜の叫聲を乾坤を裏き右往左往と蹴立
るは塵埃を人として眩暈せしむるは雑沓の
際も當りたあく落馬を事たりも土人の敏達
を体よく危難を免き機を臨んでハ荒ちりて
る水牛の脊上り傳へ傷害を避る事たりや言へ

水牛比
狂奔



至現場の水
 牛を數時間
 一日多悉く
 皆獵殺せし
 是滿眼の駭
 る積累や
 と十字に横
 るをせり獵
 士を頼て家
 小降り既り



更一仕事以營を悠然烟草を喫し婦人其を獵
 場に出で來り斃さるる水牛其皮を剥き肉を斷
 ち懇切に其筋を剔畢へ銘力此かぎり家
 荷ひ歸り擧て食料の多き以祝ふ去と際限あり
 去の土人を常と舞真以好と就中も時を以て
 水牛踊と号し恰も狂氣の如く踊る多しある

十分の職業
 以成し遂げ
 多しとて翌
 日に至る

バナと別り去るは獵り廻りて真の動物は如く
 扱ふ者あり踊人を終る疲勞し獵人より射かけ
 らせるは一條の鈍箭を肩ひ倒さ臥して死せる
 姿成爲せば婦人ら此偽畜の上り庖丁以閃りか
 し皮肉を剥断真似をせりころ水牛遠境に移
 住り其形状見せしめ至れば復歸来る為り以踊を
 執行せべしと醫家より告げられたるは以て
 考へ如斯まる内水牛の近郊に來るは無智無學
 乃土人全く水牛を踊り疾せし事と思ひ雜沓醫
 家に至り喧囂しく謝言をせ云々

アメリカ土人老後の事

アメリカ乃土人年老て已り獵狩戰鬥し奔走從
 事する能はば身體甚衰弱しと養護をべきと此
 以要る期に至るや雖も眷屬を都て獵狩と業と
 困苦を歴て一定の地に住居せし以てこれ
 を保養をき所以と知るは距離たる曠野に於て
 少く雨露を凌ぐべき小舎を作り些少の肉及び
 水等附與し老年を其らに居るは子孫
 皆暇を告て去る如斯曠野に取捨らるるは老
 人の訪へ慰むる人も多く耳ふ入るを以て只

我狼の声はと多寥々たる有様警ふるよと此
をく開化せし國の人民を聞て寒心をなかり
ふさぎ土人の風習も其身も年老も父母
成かく捨たば子の己れ成捨る成さへも自
ら年老とる身も余人の手足繩をれと捨らる
る良策もやと觀念し別離し臨み其家内もは以
後各自愛とよや命し更し苦情と訴へると言へ
り旅人アメリカの曠野を通行もはと臨み皮不
と造りもる小舎の内より少くは白骨と見ると是
則ち老人は捨るとたる地なり

○ 耐

セグール沼ふお多る驚き事
往昔アメリカ洲に移住する歐人アメリカ土人
を黒奴と買ひ取りて奴隷とふんじ其の
鞭役も絶えず屢脱走るセグール沼に身以隠
せり蓋し此セグール云ふ松の種類樹木
もて枝條鬱茂し其まば森と呼ぶも亦可なり
成沼と稱する地面淤泥も多每歩膝と沈る
を以てぬりぬの樹甚稠密も生長し人辛
其幹の間成通行をなぐ丈高く幹も枝を生ぎ
單頂上の満枝を甲乙互に接し鬱葱乎やと更

鷲セシール

樹上ニ栖宿す



天日代見事能く風日ぬる全林動揺して
 幹枝の摺れ合ふ聲を激烈意外に出るり満地の
 枯枝を積累せしむ足と容る所も多し偶此樹に
 生ぜざる終つ此間地あま八月桂樹繁茂を此邊
 死水に鰐魚の潜覗をなせたりルの鱗鱗と
 る以愛をねむり又鰐魚と同しく此地に住む鷲
 何れ種類多くあまをなす夜鷲めして梟乃如く
 夜間を飛行し毎年春の間に群り来りて去年の
 旧巢よ入る未ど若くして巢のやれを新と
 ぬらね以造り巢ハ最も高き樹に頂り作り裏面ぬら

小枝及び毛羽と布り其形の大なる一樹少くも
一箇に巢以載き此印の雛より大きく數四箇以
産す雛も化生し二三週と経るバ枝上より切
りに羽遣以練習せり親鳥も常小夜に入ると食
と求ふために巢以脱出し泉沢地澳に至るハ墓
昆虫及び其他乃食料累乎せし其腹を肥す小
足より驚る悠然水中小直立し近傍り魚の来る
以待てり墓も其性魚よりも敏く鳥乃来る以知
るバ俄り泥申し潜伏せり然し驚亦狡猾なる乃
みおるに甚ど耐忍強くし敢て其地と去らず

僭小墓乃沉く多處所を接近し其動揺と窺へり
斯れも知るに泥中におもる墓も四面の静うふ
るに心と安んじ少くも頭以水面に現るせハ待
設けよる驚る嘴を以てて是以捕ふ以鳥頗る貧
欲深く無數乃魚墓以喰ひ十二分り満腹して後
巢も帰りて此消化を以て間を片足もて立ち休足
を取るりアメリカ土人此驚の羽乃長き以称美
し飾りやして頭上り結ぶり

烟草及馬鈴薯の事

往昔英國に馬鈴薯蕃殖せむ此の薯及び烟草

米田史
望人

煙草



五
七
七
カ

中より煙乃發するは認
 る大に驚き去る身體不
 火のかりふるを於此
 九と周章狼狽地一桶
 乃水を持来り和解をも
 待ぶ主人の頭上を既
 ぎ掛たるとぞ然る亦好
 奇乃若殿原をテレレ氏
 小者より手あく煙草は
 喫ふは事始めたるは

千五百年代女帝エルザベスの御代に當り、ス
 ル、ウヲトル、ラレ、氏北アメリカ洲より携へ歸
 せりや、や當時此人アメリカ洲に至り土人の
 煙草を喫ふるに候て是必ずも適意なりと此
 るをいと首とす是は喫ふ事以習へり然る
 亦茲より抱暖し一話ありテレ、氏或年本國に
 歸省り已まの家をたつて煙草を喫ふるに其
 央一人の僕所用ありて主人の部屋に入り來る
 り此者曾て煙草を喫ふる者代も見ず又かく此
 如き植物の現在事代も聞ざる故偶然主人の口

馬鈴薯



月と越ぐる衆人の口
中より濃煙發出し老僕
敢て怪しむる所至
斯く此如く烟艸を忽
ち衆人に傳通せしむ
馬鈴薯は嗜好し是は培
殖せしむる一人由あり
因てコレレ氏此薯は實
に濟世の要物ある事と
以廣告せり其略を曰く

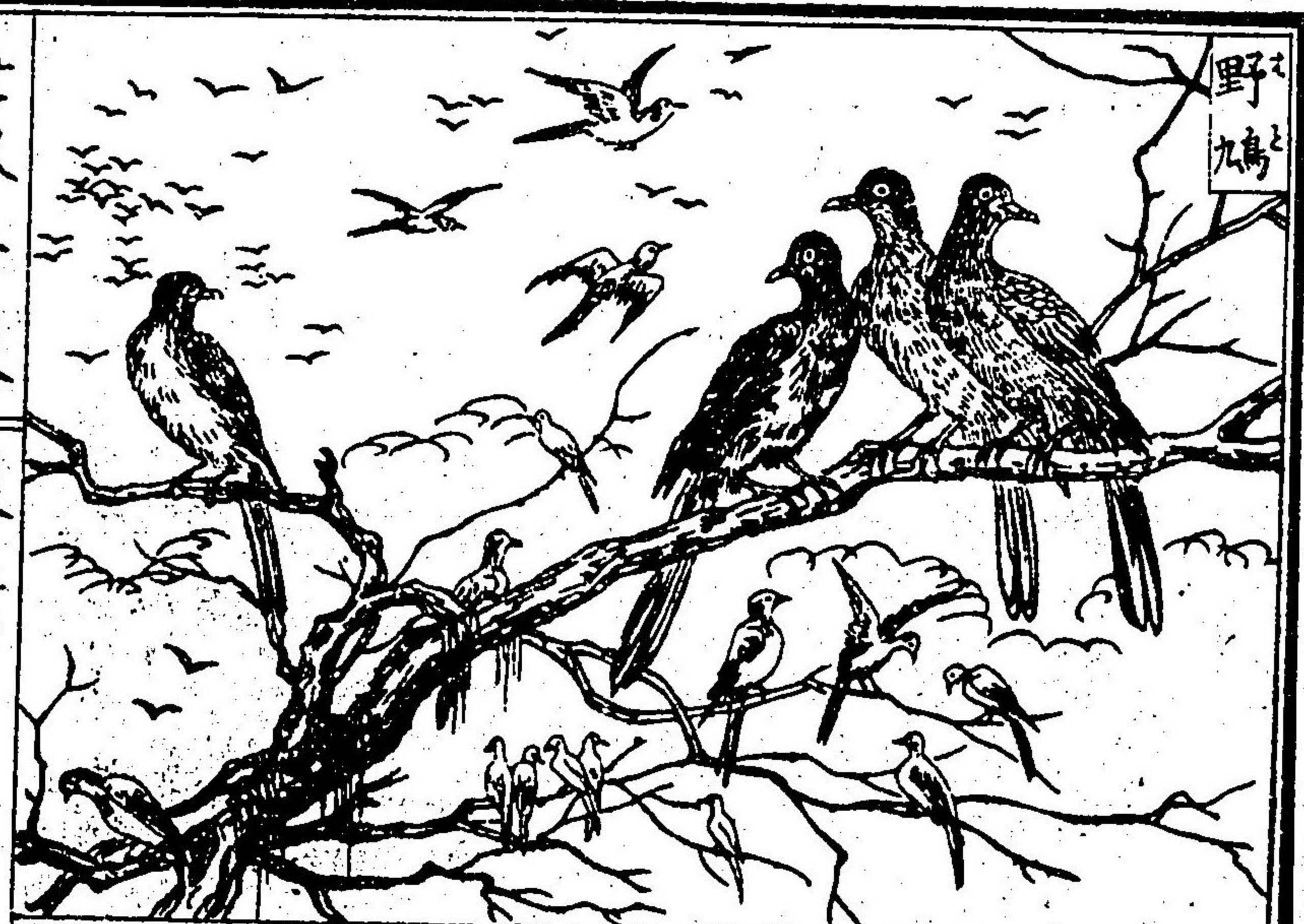
抑煙草の如きは氣候熱き國を以て生長せり
之を雖も此馬鈴薯を我英國に於て十分蕃殖せしむ
事疑ひなきは盛大了の植物を耕作せしむる
譬ひ他は穀物に水旱に損害あり此年を臨むも
猶人民一般飢饉乃憂路るを云く女帝エ
ルサベスと知恵深くコレレ氏乃辭を實し
もを聞召し日々此勝部は馬鈴薯乃調理法添さ
せ玉ひある程に御前より伺公せる貴官等も止む
事以得ず未だ以食せしむる也而も品位乃毒龍葵及
以他の毒植物に類する以て陰に此薯亦毒味

ありや此説を構へる程に女帝は深意
空しく一人として此薯は喫むは者なく少くは
豚の食料とせしむる國王ロイは十六世の
御代に至るまで人民其耕作に注意せざりし
以時ふ當て有名は植物家より食料に適する
を以て培植する中を以て薯を正しくフランス
國に天の大賜たるなりと思ひ多少の艱難を厭
むる衆人乃朝を願て致しやる培植に終り十
分成熟は功を奏せり夫の頃といへば國王の
威に依頼する一人として食するはを以てか

なりふ幸なる哉當君數所乃地面に馬鈴薯は種
付させ玉ひ出行の節に此花と玉體を添て飾と
を一朝の薯を食料に適せるとは布告あり
しより人民始えては此滋養物たる以て發明し日
毎月に嗜好を倍せし多く實に方今に至るまで
人間一般貴重なる食物と爲る事他の植物のよ
く及ぶ所にあらずは實に濟世の要品なり嗚呼此
要物を首を以て培植せしむ何人ぞや則ちフラ
ンス國バルメンチール君なり

野鳩の事

アメリカ洲に鳩乃群集する森あり去々至る
 ところ樹木破碎し巨大の枝條裂け落ちる地
 恰も一隊の軍卒に蹂躪らるる如き状見
 たり凡そ此鳥の損害は為す少かき胡桃橡栗
 等の他目も觸るるを頗る食し尋で他は轉ず其
 群乃空中に翔颺する羽音を百雷の轟くが如
 曾て川を帆走り下さるるを食物を得んる河
 岸に上陸し或る食舗を以て忽然颯風の来
 たる如き声あり多きバ大に驚き恐る此家
 去さる為り吹倒さるべしと思へり然るに亭主



野鳥

之悠然雑談し形がと應
 答色も鳩ありと云へる
 此とあり敢て意とる
 之翔颺する鳩を幾百萬
 乃限りなく層々簇々と
 空中に充滿し羽翼
 を天日映し焔灼渡り
 瞬間に色は変り若
 くは緑を白を紫を
 其の群飛三日絶へず幅

負一マイル 即我十四町四十三
 四十マイル 即我九十七里四分
 斯のおとけ群鳩の羽音る行馬驚き人々言語も
 通ぜば頗る寒心ト此を射て目的せし森止
 ちらんを射時ら其響き一層激烈しく突入り
 直ちふ羽翼を働くしと枝條を打つて此至る所
 以前の如き蹂躪を為せり人民此鳥を獲んとし
 是れも飛行する間を敢て彈丸乃届ざる以て
 胡桃橡栗と啄んや多し地を落し以て鳥銃を
 以て獵殺も亦中々食ひ尽す能はざる程の無

數を獲るやいへる斯の如く群鳩の植物を傷害
 一民人の患ひ此を以て實不悪むに堪へたり

海狸此事

嗚呼海狸も其皮の温を爲す所をば長く生
 命を全し無難に住まざるなき小皮の善良を爲
 却て其身以て亡む此媒あり往昔アメリカ土人其
 肉以て美し饗膳乃爲て折々獵殺せらるるに
 多し一歐人の皮を以て帽及び婦人の温袍
 と作るに發明し漸々此流行を爲し隨ひ相應
 乃價を得る故に土人勉て出れと獵殺し其皮

と販ぐ事とをまゝり海狸は健剛乃窟室は造り
 人の叢に注意を人にと虽とも土人常不付現ひ他
 不浮遊も俗を認免捨とふるつて去るは突々的
 成りやま川事少く毎年帽匠の手不生命は供
 とも海狸数千をま方今不至りて多く絹乃帽
 子此流行も俗を以て海狸乃交易先年之比まれ
 ば更り衰微をりと言へり去の窟室を泥土小石
 及び樹の枝を以て水邊不作をり其性質協同以
 好むより数頭群集して去の窟室は營り常
 窟内乃濕を厭ひ雨乃降灌ぎて河水乃漲ぎる



海狸

あも一同漂流の憂るり
 らん事は要し水道を遮
 断て堤坊を造るは人
 工の如くそ此智巧感を
 了る絶りある川底に
 沈没する木切より作り
 るる事多たとい水
 嵩の増を事なるもよく
 水は禦ぎて去の窟室に
 入るるを備此工と起

まや一羣乃海狸各自懇切に勉勵し全功を奏する
る俣ぐる分時の休息なく材を断る不己は此尖
まは歯を用ひ其鋭き事鋸の如くまは此堤
坊忽ち其工以遂る不至る尤全群の聊の故障亦
折を以て此土工以起まると云へり常なる水底小
生も亦蓮根の類以食と折る海を樹乃皮并草
等以喫ま又夏日本木片以断ち窟室の側り積置
冬天に至り其皮を食料と形たりそ乃弱きを此
る甚と遊戯を好む且その泣声赤子に類す曾て
一個の貴人少きた海狸の群り居たれば發見し

携へる鳥銃を以て砲殺せんと己不社々ひを
定免れり其遊戯乃声調己れが蒙る小兒
亦等し多きは怒ち殺氣以翻して其遊戯を妨げ
たりや云々

「ホガニ」樹の事

中心アメリカにふおある「ホンドウラス」江の近邊
に多く生茂せる巨大の樹あり幹堅く枝條蔓延
し葉藍緑に多光澤を含み花小さく白く其成
長甚永年以費す多故もて人の一生間みる十分
の大きみに至らば去て伐り「ホガニ」樹と名付く

即ち方今椅子食几等亦多く用ひ昔一人カマホ
 ガニ樹皮知りて英國女帝エルサベス乃治世
 における航海者スラルウラトルラレー氏始て
 アメリカより此材を持来りて己の艦を修覆
 し自ら極美の杖なりと思へり然しアメリカ亦
 於て右を此無数ある故人々亦へて顧みず此後
 数年経てイギリス亦此板木を積来りし折
 り其船將の兄醫生某ある者家を建てる以て
 去るは乞ふく戸作とんと為せり然るに匠人
 此材を堅剛し多く道具を損し到底造作の

難き材訴へ少く亦一の蠟燭箱を作せり人々見
 て去るは感歎し一般マホガニなる珍杖取ると
 称譽をばお至り多きは此匠人や工風を廻り
 し十分其工法を發明し種々の家具製作し出
 多はり人々競ふてこれに要る匠人亦俄に有富の
 身となりや此樹森を生む代倒さし黒奴を使
 用し材は法は免符と略し海口より浮べ下り用意
 せる艦に積てヤウロツバに送せり

木綿の事

世人綿乃如く目小馴を行處とて出逢を以て又

他に於るべからん英國マンチストル街に於けるや綿を貯ふる此倉庫あり製造する場所あり自他の店舗におもてを數百乃綿衣を備へ又人中に多生活の間に一日も綿を用ひ綿を着るは乃時ある事なり諸に此無量此綿を何地より生ト來るや驚くに余りたり曾て識者の説に綿を何地より生出すべしと然し全く英國より生するものも生果して何物ぞ即ち一つの植物として満園充鋪乃綿皆樹より生するを云はたりアメリカ及支那印度バルンヤコ、リ、の數國に蕃

木綿



殖を上世英國田野未だ開けぬ樹木森茂る際み於るる一個の記者此綿の事記載より曰く英國の葉は結ぶに綿を生するの植物あり人民とを以て飲んで衣類とせり此樹花白く葉黒く光澤ありて緑なり成熟の期至ると穀自ら破裂し

耕夫之收納の時を報ず婦人小兒の曉不起て是
 採るる大陽の光緑を受くもバ其色黄小炎換
 ると忌バあり時中しを売と共り取放つあり又
 綿乃と採取出して穀を樹小残し置事たり圖を
 成熟の景現せり穀の内ニ存在せる綿を穀
 箇乃種を保ち天然此俟ふまば店舗ニ備へるは
 品位と大ニ異なり先づ收納せる綿衣とす登
 此最初の科を種分離を専らと人より去
 の業器械乃助をからん偏り人力小頼る時
 甚と手間取るも此より尤港安し印度地方に於

ては器械採用ひが倍りより一日小綿一斤乃種
 と採分る此面倒譬ふるふを此をアメリカ乃
 綿作する巨大乃器械をとり多種を分離沙汰
 一日り八九百斤なり嗚呼器械の益大ひびり
 中云ふが英國より輸入の綿を衣類とな
 して凡て器械をもちひ其の働きた神速を体実
 小奇々妙々あり方今ロンドンチストル有名なる
 綿街ふさやの数年前を蕭然なる一村落ありて
 其の頃英國より綿の輸入至つた少ありし其
 紡績人力以費やひとをりて其の價乃高上り

て人々多く
綿衣と用ひ
ざるもこれ
も然るも紡
績器械の費
明ありてよ
其價大ひ
小下落し扱
け方従つて
多く各國よ



り 汽船とも
つ 多 英國小
輸 入 とも綿
宏 大 ともを茲



その器械の神速なる奇功の大略と説くん
先づ一人十籠乃生綿以機関乃最上楷不入
小を以運動不従ひ逐次楷を經て最下小達を第
一楷においとる種以分ち次り紡績一以小綴織
一日数十日以經て十篋以生綿良善を白木綿
中愛ト最下小達せり

世界史 卷之二 七

世界奇談卷之二 終

